

謀りし者ども

The Deceivers

アルフレッド・ベスター

Alfred Bester

山形浩生訳 hiyori13@alum.mit.edu

目次

1. 発見

1

1. 発見

自分が世間に見られているかは知らぬ。だが自分では、浜辺で遊ぶ少年のようにしか思えない。たまにすべすべの石ころを見つれたり、少しきれいな貝殻を見つれたりして気を取られているだけなのだ。その間にずっと、真実の大海は、まったく見出されることもなくその目の前にあるのだ。

——アイザック・ニュートン

放射線防護のジャンプスーツを着ていた。白色で、重役階級を示す。白いヘルメットをかぶり、バイザーは下ろしてある。武装していた。この準軍事使節ではあらゆる重役が武装するのだ。彼は投光器で照らされたコンクリートの平面を、夜にそびえる巨大なハンガーのほうへと、堂々と歩いていった。すさまじい自己抑制能力。そびえたつハンガーは、ドーム型の天文台のような形で、そこに黒いアーマーをつけた警備兵の正体が、入り口ハッチの前でうとうととして横たわっている。重役は、軍曹を激しく蹴り飛ばしたが、そこに感情はまったくこもっていない。小隊長は叫び声をあげ、あわてて立ち上がり、その部下たちもすぐに続いた。ハッチをあけて白服の男を通すと、男はそこを真っ暗な中へと入っていった。そして、ほとんど思いついたように彼は明かりのほうに戻り、小隊をねめつけた。小隊は全員、その注目におびえて立っている。男はまったく何の感情も見せずに軍曹を射殺した。

ハンガーの中には光はなく、音だけだ。幹部は闇の中で静かにしゃべった。

「お前の名前は？」

返答は、二進数ビットのシーケンス、高音のピツという音と低音のビーブ音だった。

「— “—” —」

「二進数ではない。音声に切り替えろ。RW お前の名前は？ RR 答えろ」

答は質問と同じくらい静かだったが、単一の声ではなく、声を揃えて答えるコーラスだった。

「我らの名前は R-OG-OR 1001」
「ロゴル、お前の使命は？」
「従うこと」
「何に従う？」
「我々のプログラムに」
「プログラムはされたのか？」
「はい」
「プログラムは何か？」
「火星の OxCam 大学ドームに乗客と貨物を配送」
「命令を受けるか？」
「認可された指揮系統のみから」
「私は認可されているか？」
「あなたの声紋は指揮バンクにプログラミングされている。はい」
「私の識別 ID を」
「我らはあなたをレベル 1 幹部と識別する」
「私の名前は？」

答は再び一連の高低ビット。

「それは統計 ID だ。社会名は？」
「入力されていない」
「いま受信して声紋とリンクせよ」
「回路オープン」
「私はデーモン・クルップ博士」
「受信、入力、リンク完了」
「監査用にプログラムされているのか？」
「はい、クルップ博士」
「監査を行うので開け」

ハンガーのドームがゆっくりと 2 つの半球に別れ、それがすべり下りて星空の柔らかい光を受け入れると、クルップがこれまで話をしてきた二人乗りの機体が浮かび上がった。深い点火ビットの上に高くそびえるその機体は、巨大な骨董品のロシアのサモワールと驚くほど似ている。小さな王冠状の頭、幅広の円筒形の胴体から、変な取っ手にも見えるものが突き出し、その導体が細くなって、四つ足の四角い土台へと続く。その 4 本足は実はジェットノズルだ。

土台のハッチが開いて、ハンガーに機体内部からの光があふれた——この船には窓など必要なかった——そしてクルップは、差し込み式のはしご段を昇り、監査のために入船した。R-OG-OR 1001 は驚くほどオーバーヒートしていた。クルップは服を脱ぎ捨て、身をよじらせつつ制御デッキへとよじ登った。そこはサモワールの王冠にあたる（無重力の宇宙なら、こんな苦勞して昇る必要はない）。主用腹部船室にいくと、熱帯じみた暑さの理由がわかった。裸の女性が、透明保育機のまわりに散らばるメンテナンス工具を扱いつつ、汗だくで悪態をついていたのだ。タコのような複雑な機器を、いたるところでいじりまわして這いずっている。

助手のクルーニー・デッコ博士だ。ヌードの彼女を見るのは初めてだったが、声は抑制され、その嬉しい驚きを示すことはなかった。

「クルーニー？」

「ええ、デーモン。船とあなたの挨拶は聞こえてた。イタッ！ちくしょうめ」

「問題？」

「このクソツタレな酸素供給が気まぐれすぎて。ついたり消えたり。これだとガキが死にかねない」

「それは許せない」

「危険は冒せないから。うちの胎児を七ヶ月も世話して喰わせてきたんだから、こんな機会に台無しにされたるもんか」

「装置のせいじゃない、周辺圧力が計数をおかしくして、供給を止めてるんだ。この装置は宇宙用の設計だから、宇宙にいけばまったくちがってくる」

「そうならなかったら？」

「この寝床をかち割って、マウス・ツー・マウスで人工呼吸してやろう」

「こいつをかち割るって？ まったくデーモン、こいつをかち割るにはデッカいハンマーでもないよ」

「クルーニー、そう文字通りに考えるなって。かち割るってのは手順をいじるって意味だよ」

「あらさようで」と彼女は這いだしてきて立ち上がり、肌は湯気をたてかんしゃくを起こしていた。これほどそそられる彼女は初めてだ。「すみませんね、ユーモア方面には考えが及ばないほうです」。そして彼女はデーモンに意味深な視線を向けた。「マウス・ツー・マウスも冗談だったの？」

クルップは彼女を抱きしめた。「いまはもうちがう。ぼくたちの子が流出したら、すぐにこうするつもりだった。もう生まれたんだよ、クルーニー……」

そしてこのため、R-OG-OR 1001 はガニメデに墜落したのだった。船は稀な百万 BeV の宇宙素粒子で誘導システムを幸運にもやられ、軌道はずれたのだ。これはたまたま起こることで、普通は手動で修正されるのだが、クルップとデッコはコンピュータを過信していたうえ、自分たちの情熱に夢中すぎてチェックを怠り、このため三人とも墜落。男、女、そして保育器の少年ともども。



このすべては物語の始まったジキル島 (ハイド氏とは無関係) でのこと。これについてはいささか自慢でっせ。物事の連鎖のいちばん発端を見つけるというのは、なかなかないことだからね。これが岡目八目の後知恵だっけのは、お恥ずかしい限り。てのも私の稼業は先知恵で八目読めなきゃいかんのよ。その理由はこの連鎖の先に行けばわかる。

私はオデッサ・パートリッジ。この物語において、事前および事後のできごとをほじくり出し、時に再構成して適切な順番に並べるといふ、ユニークな立場にあった。例えば。幕開けの R-OG-OR 1001 での遭遇は、ずっと後になるまで突き止められなかったもので、その情報源のほとんどは、まだコスモトロン・ゲゼルシャフトで流通していたゴシップ。おかげで手遅れになってからとはいえ説明された疑問もかなりあった。いずれにしても、それはただのオマケ。お目当ては他にあったんでして。

ちなみに、私の態度が軽薄に思えるなら、それはこの仕事がまったくクソきつくて、己を保つ対処法がユーモアしかないから。まったくもう、ガニメデからのシナジスト、チタニアからの妖精、およびワタクシ自身の生活を苛んだ、ジキル島で生成される陰気なパターンときたら、ありったけのユーモアが必要なほどなんですから。

さて、この連鎖の最初の部分を取りまくできごとを見よう。

コスモトロンがメタスタシス・エネルギー工場を設置したときには、グルジア沿海のジキル島を買おうとして、脅し、恫喝し、袖の下を贈ってやっと認められた。このグリーンベルト保全地域にはびこる不法占拠者たちや、しつこい環境保護団体をあぶり出し、ときには殺害して始末するのに 1 年がかり。その同じ 1 年の間に、過客どもが残して行ったゴミ、クズ、死骸の片づけもあってね。それからジキル島を 1500 メガボルトの電化プライバシーで囲い、発電所を作った。

生産のためには、とっくに放棄され忘れられた装置が必要だった。さらに 1 年かけて、古代装置を求めて博物館を探索襲撃した。そしてわかったのが、聡明な若き工学博士たちは、そんな古代遺物の扱いなんか、皆目見当もつかないってこと。そこで高級人材専門家

を雇い、引退していた古代教授連中を引っ張り出して契約し、そいつらにしかわからない装置を稼働させた。人材専門家はその監督役に昇格。それがペルソナ分析で学位を得た、デーモン・クルップ博士だ。

クルップの博士論文は、ハンチントン舞蹈病(聖ヴィタスの踊り)についてのもので、その病気が患者の知的・創造的な能力を拡大するという概念の、目もくらむ探究だった。あまりにドラマチックで、実に話題となったため、陰口屋たちは「クルップはハンチントン舞蹈病にかかっているし、ハンチントンはクルップ病をもらっている」と言ったもの。

相変わらず知性拡大に舞い上がっているときに、コスモロン工場が危険な実験の門戸を開いた。コスモロン社は太陽熱核騒動のミニチュア複製版である転移プロセスを使い、原子量 1.008 (水素) から 259.59 (アシモビウム) に到る周期律表のあらゆる元素を合成している。放射性副産物がいつも悩みの種で、おかげで職員は防護服の常時着用が義務づけられていた次第。だが放射線がクルップの実験のヒントとなった。その実験が、「連結放射線排出によるレーザー生成胎児増幅」こと MAGFASER だ。

その助手クルーニー・デッコは医学博士で、大喜びで参加。おおむねクルップにベタ惚れだったからだが、一部は機械遊びが大好きだったからでもある。二人は「Magfaser 実験」と称するものの実験装置を設計設置したが、もちろんこれは「連結放射線ウンヌン」の略称。そして試験材料の問題が生じた。ここでクルーニーが活躍。

彼女はグルジアのメディアに慎重な広告を打ったが、それは一人で悩む皆さんたちにとって、無料中絶を意味する広告だった。二人で全応募者を、身体的にも精神的にも検討し、やがて理想の被験者が登場。背の高い、色の黒いカッコいい山娘で、字は読めなくても鋭い知性を持ち、地元強姦の犠牲者で妊娠 2 ヶ月。この娘に限り、デッコ医師は慎重に胎児を胞衣ともども保存して、それをフラスコ内の羊水におさめた。

クルーニーはマイクロ手術でへその緒をバランスの取れた栄養供給につないだが、その手術はその頃には実に詳しく研究されていたので、ほとんど標準手術手法とすら言えるほどだったが、手の込んだレーザー増幅は史上初だった。どうやったのかは永遠にわからない。クルップとデッコしか知らないし、二人とともにその秘密はガニメデで消えてしまったのだから。だがクルーニーはコスモロン社重役(匿名希望)と少しランデブーをしており、彼がベッドでの二人のこんな会話を報告している。

「なあクルーニー、きみとクルップ博士が『マグフェーザー』とかいうひそひそ話をしているのを立ち聞きされてるんだが、何だね、それは？」

「略語」

「何の？」

「あなた、とってもよくしてくれたわね」

「お互い様だよ」

「だから重役の名誉にかけてくれる？」

「いつもそうだが」

「だれにも言わない？」

「ゲゼルシャフト社長その人にだって」

「連結放射線排出によるメーザー生成胎児増幅」

「何だと！」

「そうなんよ。うちの放射性副産物を少し使ってるの」

「何のために？」

「胎児を胎内期間中に増幅すんの」

「胎児！君の中のかね？」

「ちがうったら。試験管ベビーをメーザー子宮の中に浮かせとくの。もう九ヶ月で排出寸前」

「どこで手に入れた？」

「彼女の名前を知ってても教えない」

「増幅して何にするんだ？」

「そこが悩みどころで、あたしらも知らないの。デーモンは全体的な増幅しているんだと考えると、言わば子どもを虫眼鏡にかけるような……」

「大きさ？」

「脳だけど、その子の夢のパターンをモニタリングしてんの——胎児が夢を見るのは知ってるよね、親指しゃぶったりとか——でもごく普通なの。いまや、そこでやったのは単一の能力をそれ自体として一種の平方 X2 乗にしたんじゃないかと思うんだ」

「イカレてる！」

「で、その X とは、その未知の量で自乗されたのは何なのか？ あたしも皆目見当がつかない」

「わかりそうなのか？」

「デーモンは、助けを求めるべきだと思ってる。あの人はすごい賢いし、ホント最高で、そのすごさってのは謙虚なところなのよ。自分の手に負えなくなったとすぐ認めるから」

「どこに助けてもらう？」

「休暇を取って、ガキを仮性に運ぶつもり。オックスケン大学ドームに。そこにいる連中はぶっ飛んだ専門家ばっかで、デーモンの名声があれば必要な診断すべて得られる」

「試験管実験のためにそこまでやるのか？」

「おいおい、ただの実験じゃねえよ。ただの試験管実験であっていいはずないでしょ、7ヶ月も連結飽和してきた後なんだから。ガキは何か特殊能力を持ってるはずなんだけど、それが何なのか？繰り返しますがね、閣下、あっしもケー目、見当つきゃしませんかな」
彼女がそれを知ることはなかった。



何年も前にチャーミングなミュージカルを見たんだが、その司会者（演者一覧では「お話女子」）は物語を語ってオフステージのできごとを説明するだけでなく、割り込んで一ダースものちがう役回りを演じては歌っていた。いまの自分がまさにそんな気分。というのもチタニアからの妖精とガニメデからのシナジストのロマンスにおけるキューピッド役を演じる前に、いまや全太陽系の図式をめぐる歴史家役（歴史女子？）もあわせてこなさなきゃなんないんだから。

もちろん、みんな歴史なんか忘れてますわな。かの深遠な哲学者サンタヤーナ（1863-1952）曰く「歴史を忘れる者はそれを繰り返すはめになる」そしてこれはびっくり！まさにそれを繰り返してて、しかもそのバカさ加減は自殺願望でもあるのかと思うくらい。我が太陽系のサーガを思い出させてしんぜましょう、あの宇宙学コスモロジーの月曜講義をさぼったとか、そもそも化粧学コスメトロジー入門——肌合い、肌理等の一般構造に関連する一学問（2単位）——とまちがって履修届を出したのでまったく出なかった人もいるでしょうから。

「新世界」のまったくの再演。イギリス、スペイン、ポルトガル、オランダが17世紀にアメリカ大陸を植民地化して戦ったように、地球人たちは27世紀に太陽系を植民地化して、いまや言い争ってる。千年くらいじゃ人間の性根は大して変わらない。変えられるものなんかない。ご近所の仲良し人類学者に聞いてごらん。

イタ公どもが金星ことビーナスを掌握。ビーナスはイタリア系だったからで。連中はそれを、アメリーゴ・ヴェスプッチにちなんで「ヴェヌッチ」と呼べと固執（そいつにちなんだ名前の別の場所もありましたねえ）。テラの月、ルナはこれ以上ないほどカリフォルニア（「だってよ、あの太陽だぜ！ギグスヴィルみたいな、ってかスゲえじゃん！」）で、そのイカれたドームはどれをとってもムキムキビーチかビッグ・サーかってな具合。テラ自体が古くさい Wasp 回廊に受けつがれちゃったよ、他のみんながさっさと離れてったから。

イギリス人は自分たちの地元の嫌な天候にいちばん近いのが火星だと思って、イギリス

ドームは「明るい時期」「降水」とチャールズ・ディケンズ「ホワイト・クリスマス」にプログラミングされてた。ここで面白ポイント 1 つ。火星「年」はテラ年の二倍近いので、やつらは 1 ヶ月 60 日にするのか、一年 24 ヶ月にするのか、どちらかを選ぶしかなかったこと。意見がまとまらず、したがってクリスマス、復活祭、ヨム・キップルではえらい苦勞となった。

わかってるだろうけど、かなり単純化してますからね。実際には、火星はイギリス人が多数派だってだけ。ウェールズ人、スコットランド人、アイルランド人、ヒンズー、ノヴァスコシア人、さらにアパラチア山地人、つまりアメリカへの 17 世紀移民の子孫たちもいる。混血する者もあれば、孤立を選んだ者もいる。

同様に、ルナが「これ以上ないほどカリフォルニア」だったのは、そのセグメントのイカれた魅力が他のドームすべてを魅了したってこと。メキシコ系、日系アメリカ人、カナダ人、ヴェガスにモンテカルロのゲーミングセンターまで。カリフォルニア連中は、そいつらみんなを、ビキニやルナ・デューンバギーやホーリスティック健康法、リフレクソロジー、さらに「人間の可能性」「インターフェース」「あんた、どんなスペースにはまってるの？」式の浴槽おしゃべりに目覚めさせたってわけ。

太陽系についての私の説明では、その点はお忘れなく。ごたませの中で支配的なものを特出してただけなんだから。

海王星のトリトンは、太陽系で最大かつ最も遠い居住可能な衛星だけど、日本中国系で、それが短縮して「ジャップ=チャンコロ」「ジャンコ」になったけど、他のアジア系人種もいた。そいつらは昔ながらに傲慢不遜、「内側の夷狄ども」と呼ぶ連中を見下してたし、太陽系に突然、青天の霹靂のように現れた驚異の新エネルギー発電装置「メタ」(転移メタスタシスの略)の発見でそれに拍車がかかった。このメタのおかげで黄金の歴史すべてに輪を掛けた紛争が引き起こされたんだけど。

人類は何世紀にもわたり、飲んだくれの船乗りみたいにエネルギー源を無駄遣いして、いまやとんでもなく高価な残り物かき集めに陥ってた：

準化石燃料や半化石燃料：泥炭やオイルシェールなど

太陽、風力、潮汐力(設置が複雑で、大金持ちでもないが高すぎ)

未燃焼の炭素：煤塵、煙突のすす、硫黄を含む残留物

機械排気の BTU

ゴムやベニヤ板産業、プラスチック工場の廃熱

促成パルプ樹木森林：ポプラ、柳、ハコヤナギ(でも人口爆発で栽培面積は限定)

地熱

スリーマイル島式原子力発電は、いまだに炎上するより凍死を選ぶという人口の半分により反対され阻止されていた。そこへやってきたのがメタ。トリトンで発見された予想外のエネルギー触媒で、まるで母なる自然が「無駄遣いについて懲りたんなら、これで救われますよ、もし賢明に使うならね」とでも言いたみたい。

太陽系が懲りたかどうかは、お手並み拝見。

木星のガニメデは強烈にアフロで、茶色人種と混血ムラートの味付けが加わってる。フランスとその植民地から黒人たちが奪ったもので、こいつらは白んぼどもとの絶望的な戦争に嫌気がさして、いまや内輪で戦争してる（原始的なんじゃなくて、苛立ってるだけ）。他の黒人茶人たちも手を貸してた。コンゴ対タンザニア、マオリ対ハワイ、ケニア対エチオピア、アラバマ対オールアフリカ、その他もろもろ。SAACP こと太陽系有色人種地位向上協会の絶望の種。

アフロドームはカラフルで、観光客もたくさん。ヤシの葉で屋根を葺いた小屋（屋内トイレつき）で部族村を再現しようという試みもあった。そこに小さな庭をつけて、ペットにアフリカ動物を飼うわけ。ニルガイ、ヌー、赤ちゃんゾウ、サイ、各種エキゾチックなヘビ、ワニさえも（池を作るだけのお金があれば）。ワニは絶えず悲嘆の種だった。若いワニはグルメ食材だったので、ワニ誘拐という許しがたい犯罪がガニメデでは横行。

オランダ人その他は木星のカリストにいて、ここもガニメデ同様、水星よりでかい。連中のドームは中世ブルージュを思わせ、石畳の通りと道にせり出す家屋が並ぶ（カリスト商工会議所は嫌がるだろうけど、地元の売春婦はいまでも窓の両側に小さな鏡をぶら下げて通りの全長を見渡せるようにしているし、カモ候補が通ればいつも窓ガラスをコインでコンコンコンと叩く）。

カリストは黄金、銀、宝石カット事業が大きく、これでドームに大量のユダヤ人口がやってきた。ユダヤ人は昔から宝石の専門化で、昔からオランダ人とは友好的なの。あと伝統的な芸術家集落もあり、太陽系のその他部分は、レンブラント-29-ラインだのヤン-31-フェルメールなんて名前の連中が、まともな人間なら家に絶対置いたりしないようなアヴァンギャルド作品で、どうやって需要を作りあんなにゼニを得てるのか不思議がってる。

土星のタイタン（冥王星のタイタニアことチタニアとおまちがえなきよう、こちらは大量に後述）はイギリスの旧オーストラリアみたいに始まった。見込みのない常習犯罪者を流す場所だったんだけど、やがて太陽系はその輸送費よりも処刑費のほうが安いと考え、善行者だの良心の痛みなんかクソ食らえと言いはじめた。タイタンの子孫たちはいまだに、アナクロで理解不能の受刑者隠語をしゃべり、いまだに太陽系に対する古来の憎悪の偏屈地獄で、この忠実なる歴史にはまったく登場せず、唯一古典的な一文「一等賞はタイタン

一日、二等賞はタイタン一週間」を提供しただけ。

フォボス、ミマス、木星第6衛星と第7衛星には、各種宗教、演劇集団、食生活、性的禁欲に献身する小さなイカレコロニーがある。たった1つの美しい驚異的な例外を除けば、太陽系の惑星や衛星には原住民が発見されたことがなく、オランダ人どももカリストを24ドルで買う必要はなかった¹。火星のイギリス人に対するインド人の戦争もなし。「星生まれのジョーンズ」を名乗るふざけた野郎が始めたカルトは、自分たちが外宇宙から太陽系によって子供時代にこっそり誘拐されたんだと信じていて、千人かそこらを集めた。そいつは水星のカロリス盆地のジョーンズドームを創始したけど、そこはどのみちだれもほしがらない場所だった。

水星の「一日」は地球の88日に相当し、温度は鉛が溶けるくらいまで急上昇。星々からかっさらわれたエイリアンどもは、自殺するまでもなかった。ある日ドームの断熱が壊れて、みんなこんがり焼け死んだ。グランギニョル演劇の恐怖に喜ぶようなサディスト連中どもは、しょっちゅうジョーンズドームに出かけて、黒焦げの凍ったミイラを眺める。ビョーキのユーモアのセンスを持つイカレ野郎が、星生まれのジョーンズの口にリンゴを突っ込んだ。まだそのまま残ってる。

そうそう、でもその唯一の驚異的な例外チタニア、予期せぬものの妖精、ウラヌスの娘、天の神話的支配者。ここでは本当に先住民を見つけたの！偉大なウィリアム・ハーシェルは、かつて1781年にお手製望遠鏡で、言わば偶然にも天王星を見つけて、六年後にその衛星チタニアを発見。何かご質問は？

Q: はい、説明お願いします。

A: えー、天王星は非常に明るいオレンジ、赤、青の帯で覆われ――

Q: いや天王星じゃなくてチタニア。

A: あ、そうですね、魔法の月。なんつーか、宇宙にはユーモアのセンスがあったみたい。星系やその組み合わせのほとんどすべてには「変なヤツ一滴」が追加されて、調和と秩序にあかんべーしてる。いささかロジャー・ベーコンの有名な一節「比率になにか奇妙なところのない卓越した美は存在しない」を思わせちゃいますよね。

Q: フランシス。

A: え？

Q: ロジャーじゃなくて、フランシス・ベーコンのほう。

¹ 訳注: オランダ人がアメリカ大陸にやってきたとき、ニューヨーク市のマンハッタン島を24ドル(相当のガラクタ)で買ったという逸話がある。

A: フランス。そうだった、ありがと。太陽系の組み合わせでは、チタニアがその奇妙なもので、その他すべてが驚愕絶望。驚愕は、得られてる数少ないヒントや情報が驚きだからで絶望はそれが理解不能だから。

Q: どういうものなんですか？

A: 宝石や水晶に馴染みがあれば、どんな結晶体にも流体包有物があるのはご存じよね。大きさと、包有物は半径 1 ミクロン以下から数センチまで様々。半径 1 ミリ以上の包有物はかなり珍しいの。センチ級なら博物館もの。

Q: でも宝石の価値は台無しになりませんか？

A: 確かに。確かにそうだけど、でもいまの話は結晶の地質学だから。包有物のほとんどは、純水に近いものから濃縮塩水まで各種の濃度で各種の塩溶液を含んでる。またほとんどの場合は気体の泡が含まれる。気泡が小さくて、そこにぶち当たる分子の数の乱れに反応できるくらいだと、ギクシャクしたブラウン運動で絶えず動き続けてるのが見えます。

$$\frac{n_1}{n_2} = \exp \left[\frac{mg(p - p')N_o(h_1 - h_2)}{p^{RT}} \right]$$

Q: 話が見えなくなりましたが。わかってます？

A: 失敬。ちょっとエラそうにアインシュタイン入れてみちゃったけど、それはさておき、そういうあぶくを顕微鏡の下で見て、それが十億年もその独房内で神経質に動き回っていたらと思うと、わくわくしちゃいますね。

Q: いつになったら魔法の月、チタニアの話になるんですか？

A: そう慌てない、慌てない。一部の包有物は、その液体の中に複数の結晶がありますの。一部は複数の不溶性液体で構成される。気体だけのものもある。包有物の中の結晶に、さらに流体包有物があるものもあり、それが何重にも続く。で、これをそいつの半径千マイルにわたって続けると、できあがるのはチタニア、太陽系の変なヤツってわけ。

Q: なんと！

A: そうなんですよ。無窮の時を経て蓄積した彗星のゴミや瓦礫の地殻の下に、この衛星は半径 30 センチから数キロの巨大結晶の集積体を含んでますの。

Q: そんな話を信じろと？

A: ええ、それが何か？ 伝統的な惑星や衛星のモデルは改訂されつつある。テラは生きた有機体かもしれないという説さえある。ただそれをつきとめられるほど深くまで掘れないだけ。気体がただの個体へと凝集したよりずっといろんなものが太陽系の形成には入り込

んだのはご存じでしょうに。

Q: そしてチタニアの結晶がどうしたって？

A: 無数の包有物と包有物の中の包有物、それが果てしなく続いています。

Q: そしてそれが生きてるとでも？

A: わからないけれど、でもそこに驚異的な生命形態が進化したものが含まれていて、独自のブラウン運動を示しているのはわかっています。すばらしいシクラクラするけど残念なことに、太陽系がそこを訪れて探索はさせてくれない。「チタニアはチタニア人のもの」というのが彼らのスローガン。

Q: どんな姿？

A: 包有物？ 一種のプロト宇宙みたいな。自己発光して、地殻越しに見分けがつくくらい接近すると、その光がシンコペーションまたはシンクロしたりします。何かそれぞれの間に、分子的または浸透圧的なつながりがあるみたいで——

Q: ちがうちがう。原住民。チタニアの土着民。どんな姿？

A: ああ、チタニア人の話。どんな姿か？ イタリア人、イギリス人フランス人、中国人、黒人、茶人、あなたの奥さん、あなたの夫、愛人三人、歯医者二人、そしてナシの木のパートリッジ²。

Q: ふざけんな。どんな姿なんですか？

A: だれがふざけてるもんですか。どんな生物とも同じ姿。チタニア人は多形変異体、つまりはどんな姿でも好きに取れるんですよ。

Q: どんな性別でも？

A: いいえ。男の子は男の子、女の子は女の子だし、彼らの再生産は発芽じゃありませんから。

Q: エイリアン文化なんですか？

A: 少なくともテラの第三紀にさかのぼる、五千万年前からってところ。

Q: 原始文化？

A: いやいや、目もくらむ先進文化。

Q: だったらなぜチタニア人たちはこれまで地球にこなかったんですか？

A: なんてこなかったと思いますね？ ツタンカーメン王はチタニア人だったかも。ポカホンタスも。アインシュタインも、名犬リンチンチンも。あるいはマッドサイエンティストのキューバをタコ殴りにした巨大ハマグリも。いや巨大科学者のマッドハマグリかな？

² 訳注: ……という定番のクリスマスソングがある。A Partridge in a Pear Tree.

Q: なんだって！危険なのか？

A: いえいえ、楽しく遊びたいだけ。次に何を企んでるか検討も着かない。予想外の妖精たちなんですから。

そしてその一人がシナジストと恋に落ちたってわけ。



私たちはこのシナジストを、こっそり数年にわたり尾行して、一種の猟犬がわりに利用していた。実際、そいつのコードネームは「ポインター」。どんなふうにご利用したか知りたいでしょ。たとえばこんな具合。

太陽系に偽造コインやトークンがあふれかえった。ブリタニア金属で鑄造した見事な代物。私たちはこの活動をペルトリ——ペルトるはプログラム評価レビュー技法の略——偽造品が火星から太陽系に入ってくるフローチャートはまとめたが、攻撃のクリティカルパスを見つけられなかった。言い換えると、それだけですべてを止めてしまえるような、ネットワーク内の唯一無二のつながりを見つけなきゃいけなかった。

さて「ポインター」はロンドンドームにいて、『ソーラー・メディア』誌向けにコックニーのカラー特集をまとめていた。あらゆるパターンを調べ、伝統的なコックニー式の韻を踏むスラングも見ていた。「皿(プレート)」が「足(フィート)」の意味——肉(ミート)の皿、のミートが足(フィート)と韻を踏むから。「カエル(フロッグ)」が「道(ロード)」の意味——カエルはトード、トードはロードと韻をふむ。「ティトファー」が「帽子(ハット)」の意味——しっぽ返し(ティットフォータット)とハットの韻。「ドット」が「フラッシュ」の意味(フラッシュは偽金を指す)——モールス信号のドット&ダッシュがフラッシュと韻。そしてそれこそが、我らがクリティカルパスだった。

というのもニューストランドには「ドット&ダッシュ」という骨董屋があって、扱うのは古いメダル、古い銀のトロフィー、装飾用のお飾りの剣、派手な鎚や職杖……その手の代物。すごくシック。すごく高価。コインの出所について、冶金所を精査していたんだけど手がかりなし。それがここにあった。目と鼻の先の場所で、無意識のうちに指摘されてたってわけ。古いトロフィーは銀製じゃない。ブリタニア金属製なんだ。

「ポインター」のことはいろいろ知っていたし、知らざるを得なかったけれど、でも本当にどんな種類の人間かは知らなかった——当人もご存じなかった——そしてその謎を最もうまく説明するには、彼の独特な性質を使えると発見してからしばらくたって、初めて彼と会ったときの話をするのがいいですかね。

それはジェイ・ヤエルの楽しいトーク・インでのことだった。ジェイはプロの美術鑑定家で、絵画を集めるのと同じやり方で人間を集める。ゲストは一ダース、その中にヤエルご自慢の秘蔵っ子シナジストがいた。ちょっと背が高く骨張っていて、かつては若かった男で、服を着ないほうがもっと快適なんじゃないかという印象をなぜか与えてた。

彼はセレブの中でも珍しい、マシなほうのように行動したし、いささか有名だった。バランスが取れ、おもしろがり、決して生真面目になりすぎず、名声は努力なんてごく一部でほとんどはツキのおかげでしかないという信念をはっきり示していた。そして、とんでもないユーモアのセンスを持っていたね。

万人かつ万物に没頭しそうな興味を示し、熱心に聞き耳をたてて、応答は話し手を激励してもっと引き出すものだった。そのタイミングが彼のシナジー的天才だったけれど、もう一つ素晴らしい性質も持っていた。その集団の人それぞれに、彼が没頭して関心を示しているのは自分一人に対してだけなのだと思わせる能力だ。視線をあわせると、その眼差しは、本当に重要なのはあなただけですと物語るわけ。

人々が落ち着き払い成功していると、完全無欠ではないのだと思わせない限り、敵意を抱かれる危険がある。このシナジストにもまちがいなく個人的な欠陥はあったが、一方で興味深く惹きつけるような、公式の欠点もあった。巨大な黒縁メガネをかけて、頬に傷をつけている驚異的な放射状の傷を隠そうとしていたのだ。そしてそのメガネを引き下ろして傷を隠そうとする癖があり、それがあまりに自然なので痙攣しながら。

もちろんこれがログ・ウィンターだ。会話ピットで話が途切れたとき、そのファーストネームがあだ名かどうか尋ねた。相手に口を開かせるための糸口にすぎないのはわかってくださいね。この人物については何でもすでに知っていた。それが仕事なもんで。

彼は重々しく言った。「いいえ。ログ・エレファントの略なんです。ヤエル博士がアフリカで、私の母親を射殺したときにぼくを発見しまして。ハハハブーテス・アルファから来た異星人のブリーダーによって、ゴリラと交配させられてたんです」。そしてメガネを引き下ろした。「いや、ウソに決まっていますね。実はログ・メール（一匹オオカミのオス）の略なんです。ヤエル博士が娼館でぼくを見つけてそこのマダムを射殺したんです。愛しいマダム・ブルース」と悲しそうに付け加える。「ぼくには母も同然でした」。メガネ。「が、本当にホントの真実をお知りになりたいなら」とえらく真面目くさって「ぼくのフルネームは、ログ画廊ウィンターなんです。ヤエル博士がスコットランドヤードの警視總監を射殺した後で——」

「いい加減にしろよ、坊主」とヤエルが笑った。みんな笑っていた。「この素敵な女性に、私がどうやって我が最高の発見をしたかを話してあげなさい」

「最高かどうかは知りませんが、あなたの発見ではあって、あなたの物語ですよ。ぼくがあなたの役柄を横取りするようなことができますでしょうか」

「お上品にお前を育ててしまったなあ」とヤエルは微笑した。「では手短に、ログは宇宙船の残骸の中にいたのを、ガニメデのマオリ・ドームの斥候たちに発見されたのだよ。幼児で唯一の生存者で、彼らはそれをドームに連れ帰り、そこの王様だか酋長だかのテ・ウインタが正式に養子にしたんだ」

「長には息子がなかったんです。お嬢さんたちだけで。だからウインタが死んだら、ぼくがバナナ王になれるわけです」

「そのおかげで、ログの頬には王家を示す紋章の傷があるんだ。当人はバカバカしいほどそれを恥じているがね」

「なんというか、女の子をジグしてザグっちゃわせるんです」とウインター。またメガネ。

彼の女性遍歴を知る私は、笑いをこらえねばならなかったが、彼の素早い目がそれを捕らえのはほぼ確実だろう。

「マオリ族は彼にログという名前をつけた。墜落の瓦礫で読み取れたのがそれだけだったから。アール、ダッシュ、オー、ジー。R-OG ウインタ、そのOは長音でログと発音された。だろ、坊主？」

「むしろRゴホンOって感じでしたよ」とウインターは自分の名前をマオリ式に発音してみせた。「聞いた人は『お大事に』と言いたくなるほど」

「第1部はこれでおしまい」とヤエルが続けた。「第2部。私はマオリ・ドームを訪れて、彼らの見事な木彫りを検分していたんだ。そこへこの十歳児が姉とやってきた。お姉さんはビーズのチュニックを着ていて、この子はそのビーズを指さして、そこに見つけたパターンを説明しようとしていた」

「というと？」と私は尋ねた。

「素敵な女性に説明してあげて、RゴホンO」

「見たらすぐわかるはずなんです」とウインターはメガネを引き下ろした。「パターンはビースと縫い目が三角になっていたんです：

赤-赤-赤-赤-赤-赤-赤

縫-縫-縫-縫

黒-黒

縫」

ヤエルは天を仰いだ。「神よ、天才から凡人たちを守りたまえ！」と笑う。「この子が三

角形を語るのを聞きましたか？ そういう子なんです。パターンで考え、パターンで生きる。私が翻訳しなければなりません。王様の子どもは、8つの赤いビーズの集まりを指さして、指を一本立てた。それから4つの空の縫い目を指して、マオリ族のゼロのしるしをした。黒ビーズ2つで指1本。空の縫い目1つでゼロのしるし。そして手のひらで三角形を撫でて、指を十本示した。お姉さんは、くすぐったがりなのでクスクス笑い、それが私の発見だったんです」

「何を？ 女の子がくすぐったがりってことですか？」

「まさか。その弟が天才だってことですよ」

「ビーズ細工の、ですか？」

「しっかりしてくださいよ、マダム。8個の集まりが1つ。4つはなし。2個が1つ。1個はなし。王様の子どもは二進数で数えていたんです。二進数で1010は10だ」

「当たり前にも思えたんです」とウィンターは繰り返した。

ヤエルはせせら笑った。「なんだと、当たり前だと？ 裸で文盲のマオリの子どもが、独自に二進数を発見するのが？ で、当然ながら私はテ・ウインタ王と取引して、RゴホンGをテラに連れ帰り、名前をログ・ウィンターと英語化して、教育を開始したんだが、そこで困った。パターンの天才を持つ子どもを、いったいどっちに進ませたものか？」

「数学？」と私。

「それは二番目でした。私の独断と偏見で、まずは芸術でしたが、パリでめざましい出発をとげつつも、この子は興味を失って低迷しました。それからMITで数学をやって、同じこと。プリンストンで建築、ハーバードでビジネス、音楽はジュリアード、コーネル医学、ドームせっけいはタリアセン、パロマで天体物理学——みんな同じ。最初は大躍進しますが、すぐに集中力が低迷する」

「どれもタコツボ化してるように思えたんです。全体の一部だけお互いにつながりがない。ぼくはありとあらゆるものままとまりを探していたんだ」とウィンター。

「そろそろ成人していたから、追い出してやった——」

「鞭で」とウィンターは顔をしかめた。

「ポケットに千ドルやって遊歴修行に追いやり、自分のやりたいことを見つけるまで戻ってくるなと厳しく言い聞かせました。正直言って、ボロボロになって舞い戻ってくると思ってたんです。すっからかんで従順になって……」

「浮浪人の農奴のごとくに」

「それはどこから拝借したの？」と私はウィンターに尋ねた。

彼はささやいた。「『ハムレット』第2幕第2場。これはだれにも内緒ですが、ヤエルに

隠れて英文学の研究もしたんです。ほら、『イギリスの大作家 I&II』講義。それも落第ですよ、悪食がたたりまして」

「ところがこの若者、なんとまあオーバーオールから現金があふれんばかり、太陽系がみたこともないほどの統合理論のテープを持って、悠然ともどってきやがりましたな。みなさんあのベストセラー『ロックステップ』はご記憶でしょう。ローグはルナのギャングと——」

「博士の選別を10万にまで増やしたんですが、そこで噂が出回ってカジノのテーブルから出入り禁止をくらったんです」とウィンターは笑った。「人呼んで、学者ローグ」

「——さらにカンザス州のトウモロコシ作況、トリトンのメタ、ガニメデのハイファッション、ヴェヌッチの女性運動、カリストの芸術オークションを編み合わせた——そのすべてを太陽系パターンに取りこんで、あまりにも当然のものにしたんですが、それまでだれもそれに気がつかなかった。自分の天職を見つけたどころか！ こいつはシナジストだったんです」

2. 妖精とシナジスト

シナジー (*sin er ji*), 名詞 組み合わせた行動や活動。離散的な主体による協調行動により、その全体の影響が個別の影響の合計より大きくなるもの。

——ノア・ウェブスター, 1758-1843

ローグ・ウィンターの持つシナジー感覚は、あらゆるパターンや構築物に対する全体的な共鳴ではなかった。彼には妙に鈍感で気がつかない部分があり、多くはつまらないものだが、深刻なものもあった。最も深刻なものは、彼が 3 つの言語のパターンに反応していたのに、そのうち 2 つしか意識的に関連づけられないということだった。おかげで彼は大災厄に叩き込まれることとなる。

ウィンターは太陽系口語をしゃべるが、これは彼が審問者（かつて 20 世紀には「取材記者」と呼ばれていた）で、世界のことばが彼の商売道具だったから。自分がソーマ・ゲシュタルト（20 世紀には「ボディランゲージ」と呼ばれた）を理解できるのは知っていた。多くの水準で見知らぬ相手とコミュニケーションを行う調査体験がいろいろあったからで、単語に隠されたものの背後にどんな現実があるのかを突き止めるのが彼の稼業だった。

これはすべて承知していたのに、本人がご存じなかったのは、彼がアニマ・ムンディとも共鳴しており、それが彼の驚異的なシナジーパターンの感覚を生み出していたということ。かつては、R-OG 宇宙船の墜落時に幼児が感じた恐怖の衝撃が、この超敏感さの原因だと思っていた。いまやそれが、クルップ=デッコのレーザー実験だったのがわかる。自乗された X 量は、私が「フェイン感覚」と呼ぶものだった。これはギリシャ語で示すことを示す *phainein* から取った名前だ。このフェイン感覚こそが、一見すると無関係な事実からのできごとを示されて、それらを全体へと合成できるようにしてくれるのだ。

アニマ・ムンディは、根源的な「世界の魂」。ラテン的にはアニマ=魂、ムンディ=世界。アニマ・ムンディはあらゆる生き物に浸透する宇宙精神であり、無生物にも浸透しているという説さえある。私自身、そう信じている。古い家は独自の精神と個性を持っている

る。インテリアの中で自分の居場所が気に食わず、まっすぐに壁にかかろうとしない絵をよく見かけるでしょう？ 通りすがりに必ずぶつかって注目を集めようとする椅子もあるでしょう？ 機嫌の悪い階段は人をつまづかせる。

実に多く的人是はアニマと共鳴し、強力な影響を受けている。すぐにわかる側面もある。「魂」「ノリ」「靈感」、天気や昼夜の影響などだ。だが、これらはもっと深い根底にある、礎石、全存在の生命線とも言うべきアニマ・ムンディの各種側面でしかないということにはみんな気がつかない。ローグ・ウィンターは、それに最も影響されていたのに、これをだれよりも理解していなかった。この礎石パターンに対する彼の無意識の反応の例を示しましょうか。そのパターンはフラマン娘から受けたものだった。

彼は業務で火星にいて、午後に休みをとってウェールズ・ドームの塩湖で釣りをしていた。その湖にはシーラカンスが放流されていた。「古き四足類」、白亜紀からの遺物。ウィンターはルアーを投げては巻き戻し、東から西へとエサを食べる四足類の群れを捕まえるべく東に向かって釣りをしていた。いきなり——彼はそれが直観で、自分が魚を出し抜いたんだと思ったけれど、実は無意識の第 7 感がアニマの命令に応えるよう彼に強いていたわけ——彼は向きを変えて西方向へ釣りを始めた。

数分にわたり何の成果もなしに投げていると、無人の湖畔に女子が現れた。半切りジーンズをはき、上半身裸、流れるブロンズの髪、重たい買い物用トートバッグを二つ抱えて、しかも無重力の恩恵なし。彼女はそれを下に置き、腕をさすり、にっこりして「アロー」と言った。

ウィンターはすぐにそのフランス訛りに魅了され、相手が頬に焼き付いた傷痕をジロジロ見ないことに感謝した。「今晚は。どこへ行くんですか？」

「おなり村の家のお客あるね。ディニユール買いに出かえたの」

「どこから来たの？」

「カリスト」

「でもカリストってオランダ系じゃなかった？」

「きたおとないの？」

「いや、まだ」

「全部オランダージュじゃない。ベネルクスなの、comprez? フラマン、ベルギー、ルクセンブルクもいる。わたしフラマン・ドームからきた。あなた、ツリーしてるある？」

「ご覧の通り。ディニユールに魚はいかが？」と彼はルアーを巻き取り、それを彼女の前に掲げた。「ツキがめぐってくるように、ツバをかけてよ」。もちろん大うそだったけど、彼女はすごくきれいで、実にオイシそうな身体をしていた。

彼女は困惑した視線を向けたが、彼の力強い目に力づけられ、ルアーに優しくツバを吐いた。ウィンターはもっと深い水域にルアーを投げ、ジグザグにそれを巻き戻したが、すさまじい当たりを得た。自分のツキが信じられないほど。大笑いして叫び、魚を取りこもうと格闘して、女子は興奮して隣で踊っていた。四足類に糸を与えずしっかりたぐり込んだが、最終的に岸に上がった獲物は子どもの死体だった。

フラマン娘はうめいた。「デュー！ あのフィレ (女の子)のメーガン。今日の午後に溺れた子。みんなうっと死体を探してたある」

「まったくジグ神よ」とつぶやいてウィンターはルアーを小さな水着からはずし、死体を抱え上げた。「どこへ運べばいいか教えてくれ」

ウィンターは、アニメの識域下の召喚に自分のシンセ感覚が反応したのだなどは、皆目見当もついていなかった。不均衡な死が生じ、それをアニメパターンに収めねばならず、それが彼を西へと招いたのだ。いずれ他の自然な反応で解消されたかもしれないが、ローグ・ウィンターの第七感、生命線との共鳴が彼をまっ先にそこに連れて行ったのだ。

そして、それが自分も他人も常に驚かせる靈感を生み出すのと同じアニメ共鳴だ、などというのも、ウィンターはこれっぽっちも気がつかなかった。靈感というのは、偶然に予想外の求めもしない発見を行う能力。A 地点から B 地点に向かう途中で、目先のことだけ考えていたら、たまたま X にぶち当たる。ちょうどハーシェルが天王星にぶち当たったように。この性質のおかげでローグ・ウィンターは我らが「ポインター」になったのだった。

うちのメタファイル (最高機密。アレフエージェント専用!) 「ポインター作戦」には他に何があるだろう。

彼は奇妙な記憶力を持っていた。ミリ単位まで形は覚えているのに、色は覚えられない。読んだり見たりしたすべての議論や行動は思い出せるのに、住所や電話番号は覚えられない。これまで合ったあらゆる相手の人格は覚えているのに、名前は忘れる。交際はパターンで記憶しているが、それは相手の女性にはお気に召さない記憶だろう。

スタジオのコンピュータと脳波インターフェースを可能にする人工シナプスをインストールする、危険な脳手術を受けていた。ウィンターは考えるだけで、ワークショップのコンピュータを操作し、概念を印字、テープ記録、画像描写できる。こんな高度な技法を使える人はあまりいない。不動の集中力が必要で、よけいな連想に気を取られてはならないのだ。

パターンの歪みやずれを解明するためには何でもする。ウソをつき、インチキをし、誘惑し、盗み、脅し、下手に出て、十戒のすべてと十一番目の戒律 (汝つかまるなかれ) を破り、仕事でそのすべてに違反していた。

33歳、身長186.7センチ、87キロ、健康。昔々、ルナのフリスコ・ドームからの愛しい少女と結婚していた。髪を兜型に結び、切れ長の黒い目、しなやかな水泳体型、巨乳、いつもウィンターが惹かれるタイプ。あらゆる文に、当時ルナ・ドームでの流行語で拡大しつつあったイグ語を散りばめる。「ジグ、いやきみはギグ愛してるけどね？でもあたし、ジグ眠いだけで、もう寝るよミグ」

チャーミングで気まぐれ、楽しいけれど、やんぬるかな、IQ方面はごく平凡なので、結婚は破綻。ウィンターは女性が大好きだったが、対等な関係のみ。そうした女性の一人は、これまた細身で胸デカ人種だったけれど、ウィンターの考える対等なんて、ご当人ですら満たせるはずがないと苦々しく語った。それに応えたのがチタニア人の妖精。



シナジーのある日、人生が変わった。

ウィンターはヴェヌッチの女性運動審問任務から戻って、いまだにボローニャ・ドームの激しいできごとでショックを受けていた。それが理解不能だったのでなおさらショックだった。これが人生を変える日の前夜のことだった。

彼はボザール・ロタンダのアパートのワンフロアすべてを占領していた。この複合施設は張り出し窓、暖炉、創造的なアーティスト同士をお互いから遮断する分厚い壁を持った、古いエドワード朝様式で建てられていた。この断熱遮音で、コロラトゥーラと格闘するソプラノの絶叫、「Gマイナーの銀河ガボット」の轟く大音響、ヌースベック翻訳中のオックスフォード英語辞典口述などを抑えてくれる。

彼の住戸はオールドファッションで、趣味にぴったりだった。ジョージ朝内装の大きな居間、ユーティリティ・キッチン、化け物のような2メートルのバスタブ、裏には寝室二つ、一つは大きく、一つは小さい。小さい方はきわめて簡素で僧侶の房室を思わせた。大きい方が彼のワークショップでぐちゃぐちゃ。壁は一面に本、テープ、フィルム、ソフトウェア。机代わりの会議室テーブル、神経接続されたスタジオコンピュータ——使っていないときには、読み込みのスイッチを確実に切っておかないと、アパートの中で考えていることすべてを記録してしまう——大量のノート、生フィルムやテープ、床に散らばる古い記事の書き散らし、一部はスプールからほどけてしまい、ラオコーンと息子二人を探すへビの群れのように見える。

あまりに神経が参って、旅行トートバッグを荷ほどきもせず、着替えすらしなかった。アリタリアのジェットは決して清潔さで知られていないというのに。かわりにウイスキー

のボトルを持ってきて、居間のソファにすわってコーヒーテーブルに足を上げ、酒で神経を鎮めようとした。初の殺人から回復しようとしていたのだ。それがヴェヌッチで昨晚起きたことだった。

転換点は一瞬で起こる。これがウィンターの人生を変えた、ポローニャ・ドームの暗いセントラルガーデンズでの三秒の乱闘だった。女の子とデートの待ち合わせをしていたところへ、殺し屋ナイフを持ったゴリラが、暗い茂みから飛びだしてきたのだ。子供時代の長年の訓練でウィンターの反射神経は鍛えられていた。彼は自然で予想されるように、力に力では対抗しなかった。むしろ脱力し、へなへたと倒れ、攻撃者が空振りして倒れるところで横転し、殺し屋の背中に飛び乗った。股間に膝で 2 撃、ナイフを持つ手首はねじ上げて両手でへし折り、ナイフをつかんで右の頸動脈を切る。このすべてがうなるような沈黙三秒間。殺し屋が死ぬまでにはずっと長くかかった。ウィンターはそのことは考えたくなかった。

「でもなぜだ、ベイビー、どうして？」と彼は考え続けた。

ドリンク三杯後に、急に思いついた。「いま必要なのは、女に溺れることだ。パターンが現れるのを待つにはそれしかない」

ログの呼応体の一人（彼は一ダースもの代替人格を持っている）が応えた。「好きにしるよ、でもでっかい赤本をワークショップに置きっぱなしだぜ」

「なんだって、ジグジーに賭けて、オレは歌や物語で有名な小さい黒本を持ってないんだ？」

「なんで電話番号を暗記できないんだ？ まあいいや。じゃあご婦人方のご相伴を願いますか」

電話を三本かけたがどれも不首尾。さらに三杯呑んだがどれも上首尾。裸になり、僧坊の日本式ベッドに入り、もぞもぞして、呪詛を吐き、やっと眠ってイカれたパターンを夢見た

イカれたパターン

カれたパターン

れたパターン

たパターン

パターン

ターン

ーン

ン

翌朝ウィンターはかなり早めに目を覚まして起き出した。まずはネットワークに出てプロデューサーと脚本会議。次に出版社と図版をめぐって一戦交える。最後に『ソーラーメディア』に出向き、編集コリドーに入ってお決まりのサーカスパレードを実施。スタッフにキスしたりつねったり分け隔てなく一通りやってから、最後にアウグストス（チング）スターンの角のオフィスで終点。チングが編集長だ。

「記事はモノにしたの、ログちゃん？」

「した」

「締め切り三週間」

「間に合わせる。一時間ほど使える空きオフィスとかありますか？ 何本か電話したいし製作からチェック用のゲラも着てる。今日中に戻せて」

「どの記事？」

「宇宙とモンゴル愚行： $E=mc^2$ の発達障害」

「にゃんとま！ あれは昨日のうちにラボにまわすはずだったのに。会議室をお使い、ログちゃん。今日はそこでブレインストーミングしてるヤツはいないから」

ウィンターは会議室に落ち着き、電話をかけ、コピー部を4でヴェヌッチ参考文献を取りに来てファイリングしてくれと頼み、著者用ゲラテープを指先で読んだ——走電性も彼のシナジー能力の一面なのだ——そして激怒してチング・スターンに電話すると締め上げ始めた。

会議室に女子が頭をつっこんだ。筋入りブロンド頭で、髪はヘルメット状で切れ長の黒い目。コピー部のデミ・ジェルーだ。ウィンターは彼女に入るよう手振りをして、投げキスを送ると、インターコムですさまじい罵倒を続けた。「愚行の記事のゲラを見てたんですけどね、どっかのクソツタレがぼくのコピーを書き換えてるじゃないですか。何度言ったらわかるんですか？ ぼくのコピーはだれにもいじらせない！ 変えたいなら、ぼくに言えばぼくがやる。クソつたれな後知恵野郎をぼくの署名記事に入り込ませないでくれ！」

ウィンターはインターコムを叩きつけ、顔をあげると怯えたような女子に微笑んだ。「可愛いデミ、飲んだくれた男にとって、きみは何とも眼福。おいで、パパにでっかな抱擁を」と彼が腕を開くと、彼女は身体を寄せつつ震えた。「我が比類なきコピーチェッカーさん、ヴェヌッチの背景資料は全部揃えたから」

「あたし、もうコピーチェッカーじゃないんです」とデミは柔らかいヴァージニアの声で言った。

「まさか我が海洋の宝石がクビになったとか言わないでくれよ」

「昇進したんです。ジュニア編集者になったんです」

「おめでとう！遅すぎるくらいだよ。こんな賢い子を、しかも出身が——えーときみのなんちゃら出身校ってどこだっけ？」

「メアリーマウント」

「昇給は？」

「残念ながら」

「クソッ！仕方ない、それでも祝おう。出かけようぜ、ベロベロに酔わせてあげる」

「あなたが嫌なんじゃないかと、ログ」

「なんで？」

「だって……最初に振られた仕事が——あなたのモンゴル記事だったから」

「つまりあのクソッタレ野郎ってのはきみ——？ それなのに、ぼくがコムに怒鳴ってるのを聞きちゃった？」 ウィンターは爆笑し、その子にキスした。彼女は真っ赤になった。

「ぼくの扱いについて最初のレッスンを受けたわけだ。ウーマンリブ審問もきみが編集するの？」

彼女はおずおずとうなずいた。「あなたの担当になったんです。スターンさんは、勉強になるからと言うんです」

「おやおや、それって一体どういう意味だろうね？ あれまあ。見てご覧、デミ・ジェルー、ディクシーランドからの悪魔が、いまやぼくの編集者とは」

女子は深く乱れた息を吸い込んで、会議室の椅子の一つにすわった。そこには決意と恐怖の魅惑的な混合物が見られた「別のものになりたいの」と彼女は柔らかい声で言う。

「え？」

「アイルランドのハウスパーティーのお話をしてくれたの、覚えてる？」

「いや」

「あのコーシャー宇宙アホイ・シーフード・グロットにお昼ごはんに連れて行ってくれたとき」

「ご飯は覚えているが話は覚えてない」

「あそこで……みんなの足元を幼児がはいまわっていて、あなたが腹を立ててその子を蹴飛ばした話」

「おやまあギグ！」 ウィンターは笑った。「ダブリン・ドームでのことだった。集まったみんなの間に走ったショックと恐怖は忘れられない。確かにひどいことをしたが、本当に退屈なパーティーだったから」

「そしたら、幼児は愛をこめてあなたを見たって」

「その通り。そうなんだ。リアムは今頃八歳で、いまだにぼくを愛してるんだ。ゲール

語で手紙を書いてくれるよ。まるで蹴飛ばされたいというイカレた情熱をもって生まれてきたみたいな子だ」

デミは言った。「ローグ。あなた、あたしも蹴ったの」

「ぼくが——？ 蹴った——？」

驚愕の身震いで鳥肌がたった。これまでも求愛されたことはあったが、こんなやり方は初めてだった。

こっちから求めたっけ？

誘った？

ぼく自身が感じてもない相思相愛に気づいた？

ぼくはウソをついているのか？

ずっと求めていたものなのか？

こんなふうに応答体たちがワイワイ騒ぐ中、彼は立ち上がり、会議室のドアを閉め、女子のところに戻り、椅子をぐるっとめぐるらせて膝をつき合わせると、彼女の手を取った。

「どうしたんだ、デミ？ 古くさい愛なのか？」

彼女はうなずき、泣き始めた。彼はハンカチを取りだして握らせた。

「なんと勇敢な発言だろう、ダーリン。いつからなの？」

「わかんない。とにかく……起きたの」

「たった今？」

「いいえ、とにかく、なんか起きたの」

「きみ、何歳？」

「23」

「これまで恋したことは？」

「あなたのような人とはないわ」

ウィンターは、このすすり泣くほっそりした巨乳娘を見てため息をついた。そして慎重に語った。「聞いてくれよ。まず、嬉しいよ。だれかが愛を提供してくれるのは、虹の果てのようなものだし、そんな宝物を見つけられる人はなかなかいない。2つ目に、すぐにきみを愛し返すこともできるんだが、その理由は理解して欲しいんだ、デミ。愛が与えられたら、その応答は愛だ。一種の美しい恫喝だね。当たり前のことを言って君の気を逸らせてるだけなんだけどね、ハンカチをびしょびしょにされないように」

「わかってる。あなたいつも正直ですもの」と彼女はささやいた。

「だから、きみのものにはなれる。ぼくは女性にはイカレてしまう——我が悪徳の一つだ——そしていつにも増していまは、ぼくは女性を必要としているんだ。だが——いまは

こっちを見てくれ、デミ——ぼくの半分しか手に入れられない……いやそれ以下かも。ぼくのほとんどは仕事に没頭してるから」

「だからあなたは天才なのよ」

「崇拜するのはやめてくれ！」と彼はいきなり立ち上がり、部屋を横切って太陽系の巨大地図に向かうと、何ら気乗りせずにそれを眺めた。「いやはや、きみはどうあってもぼくを仕留めるつもりだろう、え？」

「ええ 로그。なんかいやだけど……ええ」

「なんとも無慈悲じゃないか。かの偉大なる 로그・ウィンターが、メアリーマウントのつまらん子にモノにされちまって、またもやぼくがだれの言いなりにもならないのに、女相手なら意地なしな道化師なのが証明されちまった」

「恐いの？」

「恐いとも、でもどうしようもない。わかったよ、こっちおいで」と腕を開くと、彼女はそこに飛び込んだ。二人はキスをした。彼のほうは、しっかり閉ざされた唇の接触のみ。

「この堅い口が大好き。それとこの手も硬いのね。ああ 로그…… 로그……」

「それはぼくがマオリの土人だからだ」

「ちがうわ。あなたみたいな人はだれもないわ、 로그」

「その崇拜はジグ止しろって。ただでさえ虚栄心は強いんだ」

「すごい！あなたをモノにできるとは絶対思わなかった！」

「なんだって？ いやまったく！」ウィンターは天井を仰いだ。「おお、ウィンタ王家の聖なるご先祖様、十五世代にわたりマオリ族を支配しいまやテ・ウニタの左眼に魂が宿る高貴なる王族の皆様……このブラックウィドー蜘蛛にぼくが喰われませんようお守りを！」

デミはクスクス笑い、喜びでシューッと音を立てた。

「女の子に見初められたら、高貴な野蛮人としてはどうしようもない。包囲され、呪われ、奪われるしかない」

「左眼なの？」とデミ。

「うん。魂はそこに宿るとマオリは信じてるんだ」と彼は右目を閉じると、左眼は彼女の喜びと期待の視線を返した。「ギグれたぜ、デミ。ここを出て外に出かけて祝おう。ただし今度はペロペロになるのはぼくのほうだ……苦痛を和らげるため」

「シューッ！」



十分な世界と、時間があつたなら、ご婦人よ、このじらしぶりも罪はない³。

まず彼女はアパートを検分し、あらゆる家具を調べ、ときには感心してみせねばならなかった。家具、あらゆる写真、あらゆる本とテープ、太陽系各地の出張で得たガラクタやおみやげ。2メートルのバスタブには、古くさい驚きで眉をひそめ（正式には違法だ。こんな奢侈品はメタ時代以前はエネルギーを食い過ぎるから）、日本ベッドに目を傾けた。巨大な象牙のかたまりの上に、分厚い白いマットレスがあるだけのものだ。そしてワークショップの散らかりようには、ちょっとうめき声をあげた。

私たちは腰を下ろし、どちらに歩こうかと考え、長き愛の一日を過ごす。汝はインドのガンジスのほとりでルビーを見つけ、私はハンバー川の潮のほとりで愚痴る。

「あたしのどこが気に入ったの？」

「いつのこと？」

「初めて『ソーラー』に本社したとき」

「なんで気に入られたと思った？」

「お昼につれてってくれたじゃない」

「熱意だよ」

「具体的には何への熱意さ？」

「ヴァルカンに惑星仲間の適切な場所を認めようとする熱意」

「ヴァルカンなんてないじゃない」

「そこが気に入ったんだ」

「このお土産箱には何が入ってるの、ねえ」

「瀬戸物の人形の顔。火星のアンゲリア・ドムのゴミ箱で見つけて、一目惚れしたんだ」

「こっちは？」

「おいおいデミ、ぼくの過去すべてをほじくり返すつもりか？」

「そうじゃないけど、でも教えて、すごく奇妙だから」

「ガニメデのビルマ・ドームにある宝石タワーの涙なんだ」

「宝石タワー？」

「何世紀も前に銃弾タワーに弾丸を落としたのと同じやり方で、合成宝石を鑄造するんだ。赤いルビー溶液を鑄造したけど、タワーから落として球体にならなかったの、ぼくにくれたんだ」

「不思議ね。中に花があるみたい」

³ アンドリュー・マーヴェル「じらす恋人に捧ぐ詩」

「うん、それが欠陥なんだ。ほしい？」

「いいえ。あなたからは欠陥ルビー以上のものがほしいわ」

「おーっとがっついてきたよ、この子」とウィンターは居間に向かって言った。「ぼくをモノにしたから、本性をあらわにしたな」

洪水より十年先に君を愛そう、そしてお気に召せば君はそれを、ユダヤ人の会話まで拒んでほしい。

「で、『ソーラー』で初めて会ったとき、きみはぼくのどこが気に入ったんだい？」

「あなたの動悸」

「ぼくが疲れてたってこと？」

「まったくちがうわよ！ リズムよ」

「それはぼくが実は黒人だから。黒人はリズム感がいいんだ」

「いいえちがいます。あなた、本物のマオリ族ですらないわ」と彼女は優しい指先で彼の頬にふれた。「その傷がどうやってできたか、知ってるわよ」

彼はメガネを引き下ろした。彼女は続けた。

「あなた、すべてを何かビートに合わせてやるのね。コンボのリズムセクションみたい。歩くの、話すの、冗談言うのも……」

「なんだい、きみは。なんか音楽キチガイかなんか？」

「だからあなたのテンポに入り込みたかった」

ルビーの涙をお土産箱に戻す彼女を、ウィンターは見つめた。晩の光が彼女に奇妙な角度で当たり、いきなり彼女は一度だけややこしい関係を持った『ソーラー・メディア』の赤毛レイチェル・ストラウスに、いきなり一瞬だけそっくりとなった。

我が植物愛は帝国より広大に育ち、しかもゆっくりと。

ウィンターは彼女に不穏なものを感じ始めていた。彼にとっては新しい感覚だ。「こいつは何にせよとんでもないイカレた始まりだ」と彼は愚痴った。

「どうして？ 楽しみとゲームだらけじゃない？」

「だれが楽しんでるんだよ」

「あたし」

「だれが遊んでるんだよ」

「あたし」

「じゃあぼくの立場は？」

「耳からのノリで合わせてよ」

「左、それとも右の？」

「その真ん中。魂があるのはそこだから」

「きみはこれまで会った女子の中でいちばんとんでもないな」

「あなたよりマンな男に罵倒されてきましたからね、旦那」

「どんな男？」

「拒絶してきた男たち」

「本当かなあ」

「そう、疑惑がないとあなたをコントロールできないから」

「ちくしょう、格がちがうようだな」

汝が目を讚えるのに百年かかる、そして汝の額を愛でるのにも。胸のそれぞれを慈しむのに二百年、だがその他の部分に三万年。あらゆる部分に少なくとも一時代、そして最後に時代があなたの心を示すはず。

「あなたがそんなふうだとは夢にも思わなかった」と彼女は微笑んだ。

「そんなふうって？」

「おどおどするの」

「ぼくが？ おどおど？」彼はいきりたった。

「ええ、でも素敵よ。目はあれこれ見ているのに、身体の他の部分はためらってる」

「そんなはずはない」

「何が見えるか言って」

「狂った万華鏡」

「もっとはっきり言うത്？」

「つまり——」彼はためらった。「言えない。つまり——きみはいつも姿がちがう」

「どんなふうに？」

「えーと……髪の毛。ときには直毛、ときにはウェーブ、ときには金髪、ときには黒髪……」

「ああそれは『プリズマ』っていう新しい染料よ。波長に反応するの。APB 放送でどうなるかわかる？ オーロラみたいになっちゃうのよ」

「それと目も。とくには黒い目で切れ長、前妻みたいな感じ。ときには大きく開いて巨大なオパールに……昔知ったフラマン・ドームからの女の子みたいな」

彼女は笑った。「そんなのトリックよ。女の子ならみんな知ってる。稲妻みたいに男をひるませるのよ」。と彼女は男のメガネを外して自分でかけた。「ほら。これで安心？」

「それと——それとオッパイパイ」彼はどもる寸前だった。「はじめてうちの雑誌に出勤したときには確か……可愛くツンと出てるだけだった。それがいまや——いまや——ぼ

くが取材にでかけてるときに成長してたのか？」

「見てみましょうか」と彼女はブラウスを脱ぎ始めた。

だが背後で常に時の翼ある馬車が駆け寄るのが聞こえる。そして私たちの前にずっと広がるは広大な永遠の砂漠。汝の美はもはや見つからない。そしてその大理石の囲いの中にも、我がこだまする歌は響かない。そしてウジがその長く温存されたる処女性を味わい、その気取った栄誉は塵と化し、我が欲情もすべて灰となる。

「よせ。頼むから」

「なぜ？まだおどおど？」

「いや、つまり——期待したものとちがう」

「もちろんよ。マッチョなマオリさん。でも決めるのはあたし」ブラウスが脱げた。

「いつまで女が待つと思うの？墓場まで？」

「ジグたまげた！船の舳先についてる女神像みたいだ」

「ええ、人呼んで中国のクリッパー船」

「きみは何者なんだ、なにやら処女開放運動の武闘派か？」

「じゃあそれを確かめてみませんか？」と彼女は笑った。「さあいらっしゃいよ、ローグ……」

彼女は片手だけでローグをソファから持ち上げると、ベッドルームに引きずりつつ、残った手で彼の服を破り開いた。

我らの力と我らが優しさをすべて、一つのボールに丸め、荒い奮闘で喜びを引き裂いて人生の鉄門を抜けよう。かくて太陽を静止させることはできずとも、走らせ続けることはできるのだ。

とはいえ彼女は、無窮の恋人の冥途の中で太陽を静止させはしなかった。暗闇の中で彼女は、百の手、口、秘部を持つ百人の女性さながら。彼をのみこむ分厚い唇の黒人女となり、固く高い尻が彼をはさみこむ。女王蜂の処女となり、仰向けで寄る辺なく、しかし喜びに打ち震える。

彼女は瑞々しく、彼の耳にあえぎつつ、その口が彼の肌からアルペジオを飲む。彼が彼女を獣とすると、外部世界の動物となり腹からの咆哮をたてる。彼女はふくらませた合成マネキンとなり、悲鳴をあげてピンボールマシンの音でうなりをあげる。タフで優しく、求めつつ譲り、常に予想を裏切る。

そして彼女は、ローグの中に明晰なファンタジーをインスパイアした。彼は鞭打たれ、十字架にかけられ、引きずられて四つ裂きにされ、灼熱の鉄で焼き印をおされる。自分たちがありえない形で絡み合っているのが、拡大鏡に映っているのを見たように思った。玄

関が叩きつけられ、くぐもった声が脅しをかけるのを聞いてパニックした。股間は果てしない爆発の火山へとふくれあがったかのように。だがこうしたすべてを通じてずっと、彼は自分がシャンペンとキャビアを味わいつつ、キラキラした会話を行っているかのような気持だった。それは初めて愛を交わすために暖炉の前でくつろぐプレリユードなのだ。

3. エネルギー

私はますます人間が危険な生き物だと確信しつつある。そしてその力は、それを持つのが多数だろうと少数だろうと、常に私をつかんで離さない。

——アビゲイル・アダムズ

ウィンターはゆっくりと日本式ベッドから出て、そっと居間へと歩き、ソファにすわって足をコーヒーテーブルに載せた。熟考し、パターンを整理していた。半時間後にデミが出てきた。しなやかで金髪、再び切れ長の目。彼のシャツを簡易版ナイトガウン代わりに着ている。コーヒーテーブルの反対側の床にしゃがむと、ウィンターを見上げた。

「愛してる」とささやく。「愛してる、愛してる、愛してるわ」

長いこと間をおいて、彼は身震いするほど息をのんだ「きみはチタニア人」それは質問ではなかった。

彼女はローグと同じくらい間をおいてから、うなずいた。「それで何か変わる？」